

talk! talk! talk! シンガーソングライター・谷山浩子さん



シンガーソングライター 谷山浩子さん

子供の頃に枕元で聞いた不思議なおとぎ話。
家に帰るときに感じた夕暮れのせつなさ。
シンガーソングライターの谷山浩子さんは幻想的で、どこか懐古的な独特の世界を透明感のある
やわらかい歌声に乗せ、デビュー以来、多くのファンを魅了し続けている。
そんな谷山さんに突然訪れた「カメラブーム」。
愛用のFM2で多くの写真を撮っているという谷山さんに写真の話はもちろん、歌の話や今後の活
動など、幅広くお話をお聞きした。

プロフィール

たにやま・ひろこ。1956年、東京生まれ。早くからその才能を発揮し、1972年、15歳の時に「静かでない」をキングレコードから発売。事実上のデビューを飾る。1974年に、当時多くのアーティストがプロへの登竜門として受けたヤマハポピュラーソングコンテスト本選会に出場し、「お早うございますの帽子屋さん」で第7回の入賞を果たす。1977年、シングル「河のほとりに」で本格デビュー、プロとして活動を始める。

NHK「みんなのうた」、CFなどにも曲が使われるなど各メディアでも活躍を続けている。2002年には、主演・音楽を担当したNHK-FM FMシアター「神様」（原作：川上弘美）が2002年度文化庁芸術祭ラジオ部門大賞を受賞。これまでに、オリジナルアルバムを30作品発表しており、近作には、2003年に「宇宙の子供」をリリースしている。

デビュー以後、全国各地でコンスタントにコンサートを行い、その独自の高い音楽性と内容は各地で好評を得ている。要望があれば、日本全国どこへでも出かけてコンサートを行うという「101人コンサート」は、1987年からスタートし、300回を超えている。1998年には芝居仕立てのコンサート「幻想図書館」を開催。2002年には2作目を発表し、好評を得る。2004年8月7、8日には「空間読書の会」第1回公演「第七官界彷徨」を開催。また、9月18日より、4つのプログラム構成で行われる定番コンサート、「猫森集会2004」を全労済ホールスペース・ゼロで開催予定。

突然やってきたカメラブーム 愛用機は師匠もオススメのFM2！

写真を撮られるようになったのはいつ頃からですか？

2000年ですね。突然カメラブームがやって来たんですよ。今思い出してもなぜ写真を撮りたくなったのか、はっきりした理由がわからないんです……多分、雑誌などを見ていてふっとそんな気になったとか、その程度だと思んですけど、とにかく急に写真を撮るということをしたくなって。それでカメラが欲しいと言ったんです、夫に。

ご主人にですか？

ええ、彼はカメラがすごく好きなんですよ！ それまでは私がカメラに興味が無かったこともあって、あまりカメラの話をしたことがなかったんです。それに、写真を撮るといよりは、カメラや、特にレンズを集めるのが好きだったらいいんですが、しばらく押し入れに冬眠状態だったんですよ。だから、私が撮りたいって言い出した途端に彼も趣味を復活させて、どういう機種を選んだらいいのか非常に熱心に話してくれまして、それでこのFM2を買ったんです。

FM2を買った決め手はなんだったのですか？

あの、師匠がですね（笑）、とにかくニコンが好きなんです。もともと鉄道が好きだったので、カメラの中でも、精密で、機械っていう感じがするものが好きなんだそうです。ニコンは野暮ではなくてきちりと作り込まれた機械の美しさがあるって言ってました。それで、実際に買いに行ったときにいろいろカメラを見たんですけど、私も曲線が多様なデザインのカメラにはあまり惹かれなくて、師匠もオススメのFM2のデザインが気に入ったんです。持ってみたら手にしっくりきて、あ、これ持ちたいって思いました。

それまではまったくカメラに興味を持ったことはなかったのですか？

もう20年以上前のことですけど、会った人の顔を撮っていたことはありましたね。でもそれは写真を撮りたいというのではなくて、人の顔写真をコレクションしていたんです。どんな写真かというのは関係なくて、ただ会った人に1枚ずつ撮らせてもらっていました。でも、結構な枚数になりましたよ。2000枚近くあります。

凄い枚数ですね！

撮った写真をひとりですべて部屋の中で見ているっていうのが、なんだか楽しかったんですよ。でも、写真に名前や日にちを入れたいってしなかったんで、後で誰だかわからなくなった写真も結構ありましたね。後でスタッフに、「これ誰だっけ？」って聞いてました（笑）。でもそれもいつの間にかやらなくなってしまっ。だからやっぱり写真を撮る自分撮りたいっていう欲求が出たのは、2000年が初めてですね。



日が落ちる街角で撮影大会「剥けていたり、色褪せた感じのものが好き」

どんなものを撮影されているんですか？

街を歩いていて気になった建物とか、看板とか、置いてあるものです。特に好きなのは雑然としたものと、色が褪せた感じのものです。人が長く暮らしている場所や商売をしている場所、ずっとそこに置いてあったものだったり、ちょっと色が焼けて褪せていたり剥けていたりするもの。そういう、ちょっと時間の経過を感じるようなものに惹かれるんですよ。きっと、私は子供の頃の日本が好きなので、その風合いが感じられるものを撮りたくなるんでしょうね。

でも、本当は人間を撮りたいんですよ。街中で歩いている人とか、立ち止まっている人とか見ると撮りたくなるんですけど、やっぱり知らない人を撮るのは気がひけてしまって、レンズを向けられないんですよ。それは気が小さいせいでもあるんですけどね。

カメラはいつも持ち歩いているんですか？



先日ご主人と出かけたという神保町で撮影した写真。
トタンが錆びて褪せている

その頃は、出かけるときはいつも持ってましたよ。街中だけではなくて、水族館に行ったり海に行ってみたり、とにかくいろんなものを撮ってみようってことで出かけてましたし。師匠と出かけるときは、大体撮影会になってました。

ただ、今は生活習慣を変えたんですけど、以前は完璧な夜型で、起きるのが3時とか.....午後ですよ（笑）。それから出かけると撮影するときは暗くなってしまいますね。だから、いつも夜の暗い写真ばかり撮ってました。暗いものは好きなんですけど、夜の写真って撮るのが難しいでしょ。周りに光源があったりするとうまくいくこともあったんですけど、見たままの薄暗い景色をそのままに撮りたいのに、なかなか撮れなかった。最近は明るい時間に動くようになったので、昼間の写真も撮れるようになりました。やっぱり昼間の方が楽にちゃんと撮れますね（笑）。

カメラを持ち始めてからと持つ前で、何か変化したことはありますか？

物の見方が変わりましたね。それまでも物を見ることは結構好きだったんですけど、意識的に注意して物を見るようになるくせはいつの間にかつきましてね。あと、人間の目って意外とそのままを見ていなくて、見たいように見ているものなんだなっていうのに気づきました。

見たいように見ている？

写真に撮って見てみると、自分の見ていなかったものが写っていることが多いんですよ。いつも見ている人なのに、その人の顔を撮ってみたら、顔立ちから全然印象が違って、「おお、そうか！」って発見するんです。だから、人の視線というのは本当に主観的な思いを通して見ているものなんだなって思いました。もうひとつ、ズームレンズを使ってみて発見したのは、同じものでも、ズームレンズで遠くを写したのと、そこまで自分が歩いていて写すのとは随分と違うものなんだなあってこと。自分は近づいていないのに、レンズがそこにどんどん近づいていくのって、あんまり愉快な感じではないんですよ。だから私は、50mmの単焦点レンズで撮影することが多いです。



ふと目にとまったという愛嬌たっぷりのタヌキの置き物。よく見ると、一匹だけカメラ目線

自分でピントを合わせてシャッターを押す 撮影までの過程が楽しい

いろいろ出掛けられたりと、かなり熱心に写真を撮られているようですね。

そうですね。今は別のブームが来てしまったのでカメラ熱は落ち着いているんですが、最初の1年ぐらいは本当に凄かったですよ。ブームが来ると一気にのめり込んでしまうので。

でも、のめり込み方があまり本格的じゃなくて、撮ったらそのまま1時間ぐらいでできるお店にプリントしてもらって、見てワーイって喜んで、それをアルバムに並べてっていうのを繰り返していただけたんですね。引き延ばしてパネルにしたいとか、現像を自分でやってみたくとかそういう気持ちはまったくなくて、とにかく撮って見るだけで。

出来上がりを見るのが楽しい？

うーん.....それよりも、被写体を探してファインダーを覗いて、ピントを合わせてシャッターを押すっていう、一連の行為が楽しいんだなって思います。私、ピント合わせにすごく時間がかかるんです。師匠が見ていると、ピントを合わせてからシャッターを押すまでがまた凄く長いみたいで、「シャッター押すまで何をそんなに考えてるの！」って言われるんです。これで撮っていいのかな？って迷っているんだと思うんですけど.....どちらにしろシャッターを押すまでが長いから、猫とか動く物が撮れないんです（笑）。実はそれで、ピントを勝手に合わせてくれるからってF80を買って、場合によってはそっちを使うようにしたんです。でもやっぱりFM2での撮影の方が楽しい。うん、こっちの方が断然楽しいですね。

突然思いついたようにブームが来るというのはおもしろいですね。

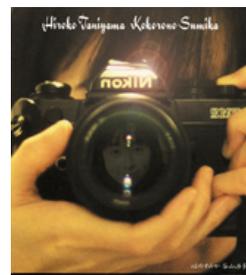
本当に突然なんですよ！小さい頃からなのかな？何か夢中になるものはありましたね。カメラだけじゃなくて色々あるんですよ。去年ぐらいからは演劇鑑賞ブームが来てますね。あと、ここ10年ぐらい「三国志」がブームでした。これは途中で断念したんですが、中国語を習得しようと思ったりもして。

パソコンもお得意そうですね。ご自身でホームページも制作されているとか。

得意と言えるのかどうかは微妙なんですけど、たしかに、パソコン暦は長いですね。始めたのはもう24年とか、25年も前です。まだOSもWindowsではなくて、BASIC（ページック）でした。パソコンはWindowsが出たときにブームが去ったというか、熱が冷めてしまったんです。ホームページも、自分でキーボードをカチャカチャ打って作るの楽しいんですよ。今はソフトを使えば誰でも簡単に作れたりしますが、ソフトがやってくれととなるとつまらなくなってしまふんです。

ソフトまかせではなく、自分で1から作りたいんですね。

そうですね。そういう意味では、ちょっとカメラと共通していますよね。ようするに、純粋に表現したいものだけにこだわるのであれば、ソフトを使ってホームページを作っても、オートフォーカスカメラで撮影してもいいわけですからね。私は、それ以前の過程や手段のところ、そこが楽しいって思うのかもしれないですね。



「カメラブーム」まった中の2001年に発売されたアルバム「心のすみか」にジャケットには鏡でFM2を持った自分を写した写真が使われている。ブックレットにもこの頃撮った多くの写真が使われている



古い建物や趣きのある神保町は、谷山さんの好きな街のひとつ。対してご主人は「近代的な街の方が好き」なのだから



古い家の軒先。汚れた窓に書かれた落書きがよい味を出している

朗読劇と歌を合わせた「空間読書の会」台詞を言うコツは言葉に集中すること!?

谷山さんのライブには、お客さんがリクエストした曲をその場で歌う「オールリクエスト」という定番のプログラムがあるそうですね。

はい。違うステージを4回見せるという構成の定番コンサートをやっているんですが、そのうちの1回がお客さんのオールリクエストなんです。そういうコンサートって普段あまり見られないらしくて、凄く楽しんでくれているみたいです。オールリクエストの

回が一番好きって人も多いんですよ。それはそれでちょっと複雑ですけど（笑）。

どの歌を歌うのかわからない状態でステージに立つというのは大変そうですね。

いや、かえって気楽なんですよ。練習しなくていいし（笑）。リクエストをもらっても、曲を忘れてるときもありますし、本番中に練習することもあるんです。でも、それを含めての企画ということで楽しんでいただきたいと思いますので。もともと、お客さんとの距離が離れているような会場や、こちらがピンと作ったものをただ見てもらうというのはあまり好きではないです。

8月には、物語の朗読と歌を合わせたステージを開催されるそうですね。

これまでも、「幻想図書館」というシリーズで2回、アンデルセンの「雪の女王」と「不思議の国のアリス」を題材に開催したんですが、今回は「空間読書の会」と名前を変えて、今までに比べて歌の要素を抑えて、演劇の要素を多くしたんです。もともとは、役者さんに本を朗読してもらって、その朗読に合わせて作った歌を私が唄って、一冊の本をライブにするようなイメージで考えていたんです。ところが、役者さんに相談してみたら、やっぱり役者ですからただ座って読むだけではつまらないみたいで、ちょっと動きを付けようとか、どうせなら衣装を着てみようとか、象徴的な道具を置いてみようとかどんどんアイデアが膨らんでしまって、今回は結構大変なことに……（笑）。

谷山さんも衣装をつけてお芝居をされるんですか？

そうなんです。前回2回も台詞はあったんですが、更に今回は演劇の分が増えてるから凄いい台詞の量になってしまっ……。増えるにあたって、今回はしっかりとお芝居の勉強をしているんですが、台詞の言い方とか、ちゃんと教えてもらって初めてこんなに難しいものなんだってことがわかりました。

台詞を言うときに、その言葉に自分を集中させなければいけないんです。言葉に流されなくて、その言葉全部が自分の中で見えているような感じで話せと。自分ではそうやっているつもりでも、口先だけ、テクニックだけで台詞を言うって「今集中してないでしょ」ってすぐ判っちゃうんですよ。朗読劇だから、テクニックだけの言葉ではお客さんが寝ちゃうよって。本番までにはものにしたいんですけど、でも、常に言葉に集中して話すのって本当に大変なんですよ！



写真は「いいと思ったもの、好きなものしか撮らない」。だから、出来上がった写真は全部お気に入りだそうだ



1枚、1枚をじっくり時間をかけて撮る。写真の雰囲気からも、その様子が伝わってくる

聴いてくれる人がいる限り これからもずっと歌い続ける

谷山さんの歌の世界観は、ファンタジー小説や童話、昔話などのおとぎ話に共通する部分があるように感じるのですが、もともと、おとぎ話の世界というのはお好きなんですか？

物語は好きですね。子供の頃から本を読むのが好きでして、お話を作ったりもしていました。読書が遊びでしたね。よく読んでそうだとされるんですけど、SFとかファンタジー小説は、特に詳しくないんですよ。特にどれというのじゃなくて、何でも読むんです。ああ、でも、寂しい話は好きでしたね。

鉄腕アトムが好きだったんですけど、けっこう寂しい話が多いんですよ。あと、小さい頃に小川未明さんの童話をよく読んでいました。特に、「月とあざらし」という話が凄く好きだったんです。子供が行方不明になってしまった母アザラシが、毎日氷山の上で悲しげにぼえてるのを聞いて、月が同情して母アザラシに南の国の太鼓をあげるんです。その母アザラシが叩く太鼓の音が北の海に響いているっていう、オチもないただ寂しい話なんですけど、寒い寒い北の海にボツンとアザラシがいて、月が出ていてっていう描写がすごくきれいで。ちゃんとしたストーリーではなくて、情景でできているような物語ですよ。そういう意味では、歌に近いかもしれない。

次回の朗読劇でも、谷山さんの世界を十分に堪能できるものになりそうですね。

でも、どんなものに仕上がるのか、実はまだあまり想像がつかないんですよ。想像がつかないというのは、（取材日時時点では）歌はまだ1曲半しか出来ていないから！どうなるんだろう（笑）。

今回は、尾崎翠さんの「第七官界彷徨」という物語が題材なんですが、10代の終わりから20代の始めにかけて凄くハマって読んでいた作家さんで、自分と似た感じを覚えるというか、他人とは思えないんですよ。凄く思い入れが強い作家さんなので、今ちょっと苦戦しているんです。

生みの苦しみといったところでしょうか。

曲作りは苦しい、楽しい、苦しい、楽しいっていうのが交互というか、マーブル状に続く感じなんです。なかなか浮かんでこなくて、出てくるもの全部クズで、気持ちがうわーってなっているときに、ふっと凄くいいものが出てくることあるんです。そのときの喜びは何ものにも変え難いものがありますよ。なのに、その後続くものがさらに糸クズみたいなもので、もうがっかりっていう、これが続く感じなんです。それが数時間で（歌が完成して）終わるときもあるんですけど、（歌が出来ずに）何カ月も続くときがあって、その場合は結構きついですね。今はきつい状態で、まだ見えてないんですけど、どんなものに仕上がるのか楽しみにして下さい。

では最後に、谷山さんが歌を通して人々に伝えたいもの、表現して行きたいものがあれば教えてください。

そうですね……ひとつには、縛られている様々なものから、心を解放してあげたいというのがあります。たとえば、日常に縛られている人は、日常を越えたところへ、分刻みの時間で動く日々の暮らしからゆっくりでできるところへ、心を解放してあげられることができれば幸せです。

それから、私わりと落ち込みやすい性格なんです。寂しいものが好きだって言いましたけど、私自身もすぐ寂しくなったり、自分はダメだっていうふうに考えちゃうんです。マイナス感情に捕われやすかったんで、それを脱ぎ捨てるために歌を作っている部分があるんです。そういう、同じような傾向のある人に、ちょっとでもいいから「大丈夫だよ」って言ってあげたいというか……そんな感じです。

これからも、そんな素敵な歌を聞かせてください。

はい、これからもずっと歌っていきたくて思ってます。聴いてくれる人がいる限り。



➤ [コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

